

日本農業遺産の島で営まれる 山^{ビン}羊^ダ畜産業

沖縄県多良間村政策参与 来間 玄次

農業が盛んな琉球石灰岩の島

沖縄県多良間^{たらま}村は、宮古島と石垣島のほぼ中間に位置する、面積一九・七五平方キロメートルの平坦で楕円形をした多良間島と、その北西約一〇キロメートル先にある面積二・一五平方キロメートルのさつまいもの形をした水納島^{みなしま}の有人二島からなる。村には一〇五八名、四六六世帯が居住している（令和二年国勢調査）。このうち農家は、二五二世帯で全戸数の五四・一パーセントを占め、県平均（二・七パーセント）と比較しても非常に高い割合を誇る農業の島である。

気候は亜熱帯海洋性気候に属し、年平均気温は二四・三度、同降水量は一九四三・二ミリに達する。島の地下五〇〜六〇メートルにかけて空隙率^{くうげきりつ}（岩石や土壌などにおける総体積に対する隙間の体積割合）が高い、透水性の良い琉球石灰岩が分布する

ことから、地表に降雨した水は速やかに地中に浸透し、河川の形成はない。このため農業用水は、農地への雨水をため池へ貯留して利用、生活用水は「淡水レンズ」と呼ばれる密度差によって海水上部に淡水が貯まる地下水に依存している。

抱^{ボー}護^グが育む持続的島嶼農業

平坦で水資源に恵まない多良間島では、琉球王国時代から浜抱護（海岸林）、村抱護（集落を抱く林帯）、屋敷抱護（屋敷林）、そして農地抱護（農地防風林）という独特の防風林を巡らし、台風や季節風から暮らしと農畜産業を守ってきた。

前述の通り、村では生活用水を地下水に頼っているが、平成一九年の県の調査で水質悪化が指摘された。これを受け、村のさとうきび農家二五二戸が立ち上がり、水質を改善するた



日本農業遺産に選ばれた多良間島の抱護。

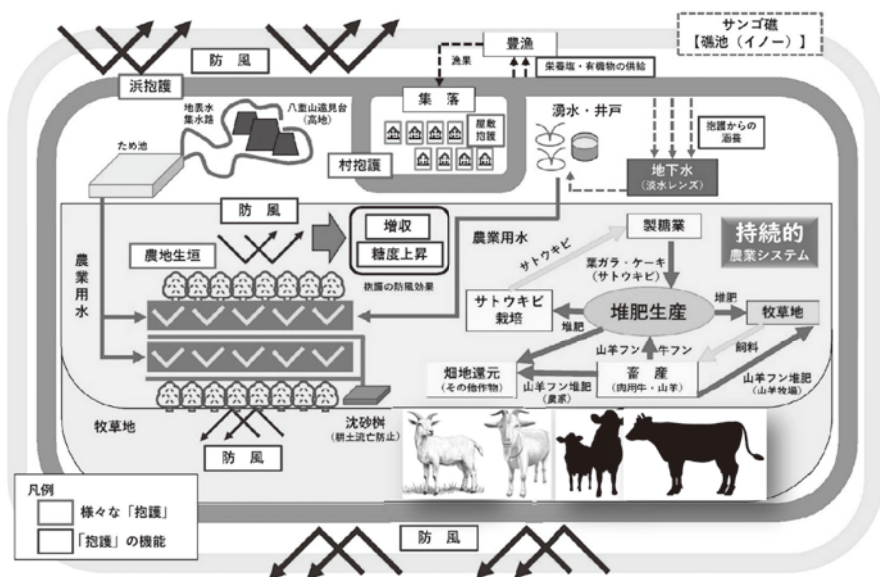


図1 多良間島における農業システム

めに減農薬、減化学肥料に取り組んだ。これが奏功し、水質は改善。取り組みが評価され、同二四年には環境保全型農業を実践する国の「エコファーマー制度」の認定を受けた。地域の全さとうきび生産農家が認定を受けるのは、全国初の事例である。

これら、琉球王国時代からの耕畜連携、エコファーマー制度の導入により、「持続的農業システム」が構築されていることが評価され(図1)、令和七年二月に「琉球王国時代の『抱護』が育む多良間島の持続的島嶼農業システム」として日本農業遺産に認定された。

なお現在、多良間村では、国営かんがい排水事業(水源はため池、補助水源は地下水)を進めている。令和七年度は、全体実施設計の最終年度で、翌八年度から事業が着手される。歴史的にも干ばつで苦しめられてきた住民のかんがい設備導入への期待は大きい。

多良間村の畜産今昔

多良間村では、古くから牛、馬、豚、山羊、鶏などの家畜が飼育されてきたが、いずれも自給自足の域を越えない小規模経営であった。それぞれの用途としては、牛と馬は耕作や運搬などの労力と堆肥づくり、山羊と豚は肉用や換金と堆肥

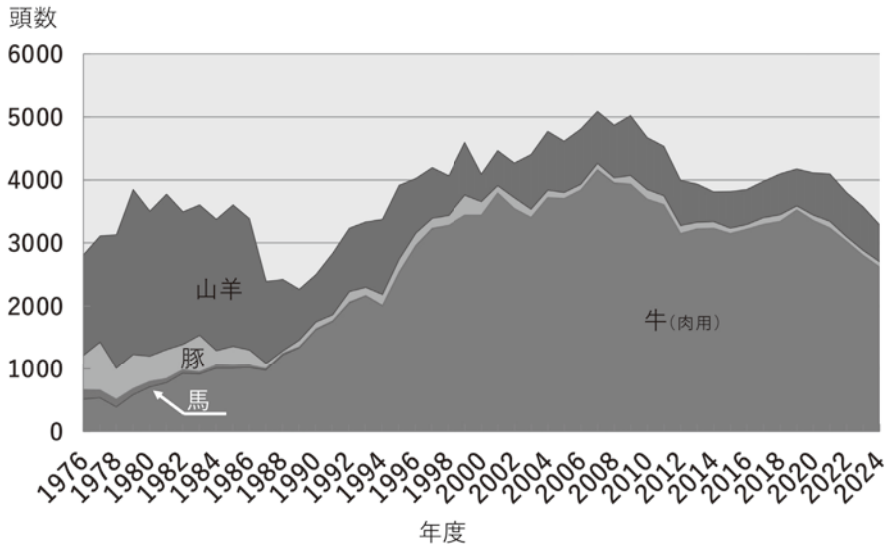


図2 多良間村の過去49年間の畜産飼養頭数の推移

づくり、鶏は肉用と卵用であった。

耕作や運搬などを機械が担う時代になると、家畜による労力は不要となる。村では、農耕馬は平成二〇年まで見られた。

昭和五三年一月、宮古郡農協多良間支所が初めて肉用牛のせりを開設。翌年からは春と秋の年二回にわたって定期的なせり市が開設されたことで、販路が拡張し、畜産農家の意欲が高まった。これにより、山羊や豚の飼育家庭も牛の飼育に力を入れるようになり、現在では、肉用牛の生産がトップの座を占め、次いで山羊、豚の順となっている(図2)。

その後、多良間村の肉用牛の飼養頭数は、平成八年度から令和四年度までは三〇四千頭台で推移していたが、同五年度より、二千頭台に減少している。この主な要因は、後継者不足や県外大手畜産の飼養撤退などである。多良間村は、同三年に「多良間村酪農・肉用牛生産近代化計画書」を策定。この計画に則り、現在も少子高齢化に伴う小離島の畜産経営の課題、持続的な取り組みを進めている。

多良間と言えば「ピンダ」

沖縄在来山羊の来歴には、諸説あるが、琉球王国時代の一五世紀頃に交易のあった東南アジアと中国(明)への進貢を通じて伝来したとされている。多良間村における山羊の伝来

は定かではないが、伝統的に肉用、換金用、糞の堆肥活用として生産されている。

昭和五十一年から令和四年までの畜産飼養頭数の推移を見ると、昭和六三年頃に山羊の頭数と肉用牛の頭数が逆転するまでは、山羊の飼育頭数が最も多く、島の産業としてもさとうきびの収入を補完する農家の収入源となっていた。

多良間村内の山羊飼養頭数の第一位は昭和五四年の二六二三頭である。往時の村の山羊の飼養頭数は、県内でも最大を誇った。例えば、平成一八年には県の山羊飼養頭数が一万頭を切り九八九〇頭となるが、このうち八七九頭(八・九パーセント)が多良間村で飼育されていた。多良間産の山羊は「多良間ピンダ」と呼ばれ、「多良間と言えばピンダ、ピンダと言えば多良間」と、称される所以の生産量であった。

山羊のブランド化による島おこしを

平成一五年の多良間空港の移転にともない、同一七年〜一九年にかけて沖縄振興法に基づく内閣府の「離島地域資源活用・産業育成事業(一島一物語事業)」を活用し、村では「多良間ピンダ島興し事業」として山羊のブランド化を目指した。同事業では山羊の飼育を行なう畜舎「山羊舎」と「山羊肉加工施設」を建設。整備した施設は、村指定管理者の「有限会社



山羊舎で飼育される山羊。

「たらま農産」が管理運営している。山羊舎の舎内にはスノコを敷き、清潔な環境を保つことで寄生虫などの風土病を防ぐ。スノコは開閉式で、下に落ちた糞はショベルカーで除去して堆肥にする。この方式は県内初であり、得られた堆肥は島内農家からも重宝がられている。島内には、「たらま農産」の他に個人経営の山羊農家もいるが、生産した山羊は同社に卸している。

山羊加工施設では、「たらまビンダ」として山羊汁のレトルトパックや、ポリフェノールが多く含まれる多良間黒小豆（サグ）などの特産品を製造販売している。

現在、村には専業の山羊生産者はおらず、すべて兼業農家である。山羊を扱っている農家の令和五年度の手取り収入は、自家消費分を別にして約五百万円と推計された。

このほか、多良間村では、一島一物語事業などを契機に、平成一八年に県内で先駆けて「多良間村山羊生産組合」を設立。山羊の増頭に向けて取り組んでいる。

島が熱狂する「多良間島ピンダアース大会」

沖縄は闘牛が盛んであるが、多良間島では、山羊の生産振興と観光振興を目的として、平成二二年より「多良間島ピンダアース大会（闘山羊）」を、年二回（五月、一〇月）開催して



山羊同士が激しくぶつかるピンダアース大会。

いる。試合は、軽量級（四〇～五四キログラム）、中量級（五五～六九キログラム）、重量級（七〇キログラム以上、最重量一一六キログラム）の三階級のトーナメント方式で行なわれる。試合時間は四分間で、延長する場合は最大二分が限度である。

大会当日は、島外からも日帰り観戦ができるようにフェリ

ーの特別運航があり、観光にも寄与している。近年は伊良部島（宮古島市）からも出場があり、盛り上がりを見せている。山羊の命名も、その特徴や屋号、方言を横文字風にするなど多彩で、例えば「アナギナー★プライン（訳…このままでは終われない）」は、その名からも逆襲を予感させる。

技も山羊特有の攻撃パターンが多彩に繰広げられる。マイダツ（後ろ足立ち）・脳天割り（立ち上がり、正面から身体を振り下ろし、角をぶつける荒技、掛け技（角掛、首駈け、足掛け）などの技が繰り広げられ、観客の応援にも熱が入る。

来る本年一〇月一八日には、第二八回大会が開催される。是非、多良間村で、白熱の闘山羊を観戦するとともに、ピンダをはじめ地域に根差した島の農畜産品を賞味いただきたい。

来間 玄次（ぐりまげんじ）

一九五一年、沖縄県多良間村生まれ。琉球大学農学部卒業。鹿児島大学連合大学院農学研究科博士課程修了。専門は地下水学、かんがい排水（降雨流出特性、風水村落景観。著書『福木巨木の巡礼誌』（共著）、二〇二二年より多良間村政策参与。技術士（農業部門）、博士（農学）。